

太鼓で繋がる「実践」：チャンゴ教室と三・一文化祭に着目して

金子, 真紀
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士課程

<https://doi.org/10.15017/7388781>

出版情報：国際教育文化研究. 16, pp.101-111, 2016-09-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



太鼓で繋がる「実践」

ーチャンゴ教室と三・一文化祭に着目してー

金子 真紀

はじめに

(1) 問題意識

本稿では、在日コリアンの人々が80年代から行っている朝鮮半島の伝統芸能の実践に着目する。在日コリアン2・3世たちが社会進出を始めた70～80年代は社会運動や人権運動が活発に行われており、指紋押捺拒否運動は記憶に新しい。そんな中、在日コリアンの人々の中から文化的な活動を主軸とする民族文化祭が開催された。在日コリアンによる民族文化祭は関西・関東地区で活発に行われ、終了したものも含めて50以上も開催されている。これは、新たな運動として、民族・民衆文化運動と呼ばれている。民族・民衆文化運動はこれまでの在日コリアン社会、また日本社会に大きな影響を与えた。この運動は現在でも、世代交代が行われながら活発に在日コリアンの人々によって展開されている。

在日コリアンの祭りでは、プンムル（農楽・風物）や民族楽器演奏、タルチュム（仮面劇）、舞踊などの文化的、身体的な活動（以下、文化的実践¹⁾）が行われている。運動が始まる以前までの日本社会において、在日コリアンの人々が自分たちのルーツである朝鮮半島の文化的実践を行う場は少なく、また学ぶ場もほとんどなかった。しかし、80年代に祭りが活発に行われるのと合わせて、民族学級、民族芸能に関する教室なども増加していった。彼らはなぜ80年代から現在に至るまで、多くの祭りを開催し、文化的実践をこんなにも積極的に行なっているのだろうか。また、現在彼らの実践はどのように展開しているのだろうか。

(2) 先行研究

在日コリアンによる民族文化祭は80年代から多くの研究者が関心持ち、調査研究を行っている。

80年代から90年代におこった民族文化祭を取り上げ、調査している飯田はそれらを総称して「祭り」としている。彼は、多数の在日コリアンによる祭りを比較検討することで、その特徴を挙げている。「祭り」を通して民族は象徴として実存し、そこには聖性と曖昧性を帯びている。それにより、在日コリアンの人々の民族イメージはネガティブなものからポジティブなものへと変わり、在日コリアンの若者は共通の「民族」体験から連帯感、新たな民族的自己意識

をもつようになった。そして、その「民族」象徴の曖昧さから、「ワン・코리아」「統一」などのユートピア性が現出しており、文化祭には多くの人々が参加可能となったのである。「生野民族文化祭」の影響ではじまった、在日コリアンの人々の民族祭りは、全国に広がるにつれて徐々に「共生」というテーマが色濃くなり、メディアなどの影響によって、「公共化」も起きていると指摘している。また、これら「民族祭り」は、70年代におきた在日学生運動の「韓国民主化や民族運動の『政治主義』の行き詰まりに対して、『文化運動』への転換がおこり、その1つの解答」ではなかったかと分析している。「生野民族文化祭」については検討が必要であることは述べているが、在日コリアンたちの活動を政治的なものから文化的なものへの転換として捉えている〔飯田 2006〕。

また稲津は、在日韓国・朝鮮人運動のカルチュラル・ターンとして生野民族文化祭を取り上げている。この民族文化祭は、在日であるという「負」を克服し、在日²であることを「正」と捉えるための「闘い」の運動として、また、民族的アイデンティティを〈楽しく〉求める運動として始まり、「生野民族文化祭の取り組みは『民衆』の立場から、それまでの組織中心のだった運動や、差別的意識の強い日本社会に対する〈民族文化〉による政治を行った運動であった」〔稲津 2007：8〕と、ここに在日運動の「カルチュラル・ターン」を捉えている〔稲津 2007〕。

以上のように、祭りの運動としての位置付けや在日コリアンの人々にとって重要な実践であったことは先行研究でも明らかにされている。しかし、非日常的な実践としての祭りのみを切りとったものが多く、日常的な実践を含めた考察は十分とは言えない。祭り以外の実践や太鼓の演奏活動を通して繋がる他のコミュニティとの関係、その影響などに関しては考慮されていない。実践は一つで完結した、独立したものではなく、様々な実践との間で生成され、展開され、変容していく。祭り以外の日頃の実践に着目することは、非日常的な実践を理解する上で重要であると筆者は考えている。

(3) 調査対象

これらを踏まえ、本稿では非日常的な実践の場として三・一文化祭を、日常的な実践の場としてチャンゴ³教室を対象とし、考察を行う。この二つを選定した理由として、これまでの先行研究において、九州地域で行われている祭りに着目した研究は少なく、現在福岡市で唯一行われている三・一文化祭も祭りのひとつとして名前が挙げられる程度にとどまっており、対象にしたものは少ない。しかし、朝鮮半島との歴史や在日コリアンの歴史を語る上で九州という土地の重要性は高い。その地域で行われている祭りに着目することは在日コリアン社会を考える上で重要であると筆者は考えている。また、チャンゴ教室は三・一文化祭で中心的な存在であり、演目のほとんどがチャンゴ教室によるものである。三・一文化祭という実践を支える要であり、彼らの活動は三・一文化祭に多大な影響を及ぼしていることが調査の中で分かっている。そのため、日常的な実践の場として適していると考え選定した。

(4) 目的

本稿は日常的な実践の場であるチャンゴ教室の活動が、どのように非日常的実践である三・

一文化祭に影響を与え、実践を維持、発展させていっているのか、また他のコミュニティとの関係や実践への影響を考察することを目的とする。祭りだけではなく、彼らの日頃の実践を観察し、80年代から続く彼らの文化的実践を紐解いていく。

(5) 研究方法

本研究はフィールドワーク調査を主としている。調査期間や回数は下記の表の通りである。

三・一文化祭	チャンゴ教室
2015年3月, 2016年3月 (計2回)	2015年4月～現在 (週1回, 4時間程度)

1. フィールドの概要

(1) 三・一文化祭概要

三・一文化祭は、1990年から福岡市東区で行われた祭りである。3人の在日コリアンたちがこの文化祭を主導していった。彼らはそれぞれ、韓国に留学し楽器を学んだり、在日コリアンの権利獲得のために闘っていたり、地域で文化的な活動を積極的に行っていたりと、自らの民族に関わる活動を行っていた。彼らは1989年に福岡市において、民族教育文化グループ「ウリマダン」を結成し、サムルノリなどの演奏を学校などで行っていた。これが三・一文化祭の母体となる。彼らは演奏活動を行う中で、大阪で行われた生野民族文化祭(1983-2002年)やワンコリア・フェスティバル(1990年-)の影響を受け、福岡でも在日コリアンによる祭りができないかと模索していた。そのとき、北九州市で82、83、85年に開催された「三・一文化祭⁴」を知り、福岡で復活させようとその祭りを引き継ぐことになった。三・一文化祭は名前からも分かるように、1919年に起きた三・一独立運動⁵の精神を継承し、「在日コリアンとして日本人として歴史にどう向き合っていくのか、そしてこれからの社会をどう創っていくのか」を基本的なテーマとしている。国籍の限定はなく、テーマに賛同する人であれば誰でも参加ができる。人と人のつながり、地域とのつながりを重視し、「在日」が自らを主張し発表できる場づくり、日本人が”隣りの存在”に協力しあっていけるようなマダン(広場)づくりを目指している。

現在では全盛期に比べると観客は半分にまで落ちこんでいる。また中心を担っていたメンバーもほぼ入れ替わり、初期メンバーの3人のうちの1人(F氏⁶)のみしか残っていない。しかし、テーマにあるように、三・一文化祭では日本人と在日コリアンの人びとが協力しあっていけるようなマダン(広場)づくりを少しずつ実現している。

(2) チャンゴ教室概要

三・一文化祭には地域の在日コリアンの人々や読み書き教室⁷の人々、また日本人も多く関わっている。そこで主要な役割を果たしているのが、演奏全般を行うチャンゴ教室の人々である。文化祭実行委員会とは別に存在し、初期メンバーであるF氏の教室でもある。

チャンゴ教室は福岡県内にある小学校の体育館を借りて、毎週土曜日に3～4時間ほど練習が

行われる。下は小学生から上は70代までの老若男女が20名ほど所属しており、在日コリアンはもちろん、日本人⁸も多い。チャンゴ教室は日頃の練習に加え、年に数回様々な場所で演奏活動を行っている。全員で参加するもの、演奏の熟練者のみで行う活動など様々である。彼らは日常的な実践を積み重ねながら、自らの技術を向上させる一方で、三・一文化祭とは異なる非日常的な実践の場面へと出向き、日常の実践を変容、展開させている。その一年間の集大成として三・一文化祭が行われる。

また、チャンゴ教室は演奏活動を行いながら他のコミュニティと関係を結び、三・一文化祭への出演や支援などと接続させる役割も担っている。このように、チャンゴ教室の実践は三・一文化祭の実践に、演奏だけではなくコミュニティのネットワークまでも影響を与えているのである。では、次節でそのチャンゴ教室の実践を具体的に見ていくことにする。

2. チャンゴ教室の実践

チャンゴ教室は様々なイベントや場所、例えば地域の祭り、小学校、教会、老人ホームなどで幅広く演奏活動を行っている。参加するイベントを選定するのはチャンゴ教室の講師でもあるF氏である。特にマイノリティの人々による活動においては実践の主旨とテーマを確認し、チャンゴ教室や三・一文化祭の活動主旨と合ったものかという点が選定する際には重要となっている。また、生徒も運動のテーマ、主旨を理解したうえで、参加は自らが選択する。賛同する人は参加し、出来ない人は参加しない。一人一人の考えをこの教室では尊重している。

本節では、チャンゴ教室が出演した様々なイベントを個別に見ていき、日常的な実践にどのような影響を与えているのか、どのような実践の変化が見られるのか考察していく。

(1) 博多どんたく港まつり⁹

博多どんたく港まつり(以下、どんたく)はチャンゴ教室の重要な活動の場所の一つである。参加できる人が全員で参加し、一日3~4ステージ行う。その日は、天神や博多を色鮮やかな民族衣装に身を包み、太鼓を持って大移動をする。どんたくは全国的にも観客数が多い祭りとして有名である。そのため、多くの人に活動を見てもらえる、知ってもらえる機会となっている。どんたくへの参加は宣伝と言う効果もあるが、どちらかといえば演奏者はどんたくという祭り自体を楽しんでいるという印象の方が強い。どのように観客に楽しんでもらえるか、また自分たちも楽しんで演奏できるか、どんたくではその点が重要となっている。

どんたくは毎年演奏場所が異なるため、初めてのステージの場合、前日か当日にならないと、どのような様相かわからない。ステージの大きさや、ステージの下は使えるか、練り歩けるスペースはあるかなど、演奏にはスペースの確保が必要となってくる。あるステージでは、狭くて全員が座って演奏できるスペースが確保できないことがあった。本来なら、全員で座って演奏する演目を行う予定であったが、演奏直前に半分は立って演奏するという方法に変更せざるをえなかった。初めて行う演奏スタイルであったため、演奏者たちもどのような演奏になるかは予想できない状況であった。しかし、これが演奏者のたちの予想に反して、演奏者も観客も一体となることができた。この演奏をきっかけに、現在新たな演奏スタイルを確立しようとして

いる。観客を巻き込む演奏方法として、その演奏構成がチャンゴ教室の新たな独自のスタイルとして獲得されたのである。このように、ハプニングの中でも実践の可能性を見出していく、または変容していく実践の様子が窺えた。

以上のように、どんたくでの演奏活動は彼らの実践スタイルを変容させる活動となっていた。この実践の変容は他のイベントにも影響を与えており、演奏の幅を広げている。

(2) 韓国・水原での祭り

この祭りは、三・一文化祭でゲスト演奏を行った韓国グループが出演している祭りである¹⁰。チャンゴ教室もここ数年は毎年ゲストとして参加している。プロの演奏家も出演するがセミプロレベルのグループが多い。チャンゴ教室の人々は、韓国で演奏するにあたって、一番に太鼓の技術を学ぶという意識を持って参加する。本場の様々なグループの演奏を聞ける機会は日本ではあまりない。韓国の演奏家たちの技術とパフォーマンスの仕方をなるべく吸収するように努める。また自分たちの演奏が聴衆にどのように聞こえているのか、耳の肥えた人々にも通用するのか、という点も確認する機会となっている。チャンゴ教室の人々にとってここでの演奏は力試しであり、演奏技術を学ぶ場なのである。そして、また来年の三・一文化祭に来てもらえるよう、精一杯交流を行うのである。

この他に韓国への演奏活動で重要な点が、楽器や衣装の調達である。この韓国演奏の機会を利用して、各々が必要な楽器を調達する。そのため必ず楽器屋訪問がスケジュールに組まれており、それぞれが自分に合った楽器を購入して帰る。そうすることで自分のパフォーマンスに磨きをかけるのである。

以上のように、韓国・水原での演奏活動は、水原の演奏集団との交流関係を維持、発展させる実践であると同時に、自らの演奏技術向上を行う実践となっている。

(3) マイノリティの人々が主催するイベント

チャンゴ教室では、在日コリアンに関するコミュニティとのつながりはもちろんであるが、他のマイノリティのコミュニティとも多くのつながりを持っている。70年代から活発に社会運動や人権に関する運動が日本では行われてきた。その中で、マイノリティ同士が日本での厳しい立場や行き難さに共感し、互いの活動を支え合うような関係性が形成されてきた。現在においてもそのつながりは維持されている。三・一文化祭においても実践を継続する中で他のマイノリティの人々との関係が形成されている。チャンゴ教室は演奏という形で、他のマイノリティの人々が主催するイベントに参加し、場を盛り上げる役割を担っている。具体的には、障がい者の人々が主催するイベントや、最近ではLGBTなどの性的マイノリティの人々によるパレードにも参加している。

活動に参加することで、日本社会でマイノリティの人々が置かれている状況や、新たに生まれているマイノリティの存在を知ることができる。その中で自らもマイノリティであること、マイノリティとして活動を行っていることを、無意識的に再確認する場となっている。マジョリティの人々と社会的に弱い立場の人々と共に生きる社会を実現するために、他のマイノリテ

イの人々が開催するイベントにも積極的に参加するのである。

以上のように、マイノリティの人々が主催するイベントへの参加を通して、マイノリティ同士の実践を互いに支えあい、その関係性を維持、発展させていた。また同時に意識的ではないが、自らの活動趣旨を再確認し、マイノリティという立場を見つめなおす機会となっている。

3つの事例を通してチャンゴ教室の実践は、日常的な実践と非日常的な実践を積み重ねる中で実践を変容させながら、演奏の幅を広げ、自らの演奏技術を向上させていた。また、他のコミュニティとの交流も彼らの重要な実践の一つとなっており、それらを通して自分たちの活動を再確認する場となっている。

3. 実践の変容－第27回 三・一文化祭－

前節で、チャンゴ教室の実践を見て来たが、彼らの実践が三・一文化祭の実践内容に大きな変化を与えている。第27回三・一文化祭では、前年度の祭りに比べて、大幅にチャンゴ教室が行う演目が増え、ゲスト演奏が少なくなっている。それには大きく2つの理由がある。一つ目に、在日コリアン内の変化と、それを取り巻く社会的状況の変化である。他のマイノリティの実践に参加する中で、三・一文化祭という実践で改めて何を伝えたいかという思いに至ったのである。1世たちの多くが超高齢者となっており、徐々に在日コリアン内でも3世から4世へと新たな世代交代が行われ始めている。また、ヘイトスピーチが過激化し、地方自治体ではヘイトスピーチに関する条例が施行され、法案も成立しつつある。それは大きな一歩としてメディアにも大きく取り上げられているが、80年代から現在に至るまでに多くのことが変化し、また変わらなかったことがある。それらに改めて目を向ける必要性が出て来た。このような状況の中で行う祭りとは何か、これからの「三・一文化祭」を考える過渡期なのである。二つ目に、チャンゴ教室のメンバーの演奏技術の上達があげられる。日常的に練習を重ね、様々なイベントでの実践を積んできたことで新たな演目を行うことができる段階にきたのである。

今回の祭りで大きな目玉が、「タルチュム」という仮面劇である。十数年前の三・一文化祭で一度行われたことがある。タルチュムは風刺的なストーリーが特徴で、もともとヤンバンという貴族を庶民が風刺したものであった。三・一文化祭では3人の登場人物が一人一人のストーリーを話した後、喜怒哀楽を表現しながら踊る。今回の文化祭では、第1回目に上演されたストーリーがそのまま一人目には使用されている。そのストーリーでは在日コリアンとしての葛藤や、自分は何者かということへの疑問などが描かれている。文化祭に来ていた在日コリアンの若者もこの内容に共感を示していた。それは、現在でもその当時と変わらない、日本社会における在日コリアンたちの生き難さを物語っている。また、二人目は現在活発に行われているヘイトスピーチへの怒りを表現しており、彼らの暴力的な表現に対する怒りを自らの身体的な表現へと変えていく様子が描かれている。三人目は、そのような生き難い状況の中でも、在日コリアン1世のオモニたちが読み書き教室に通い、大学生などのボランティアたちに支えられながら、日本語の読み書きを習得していく様子が語られ、学ぶ喜びが表現されている。このストーリーはすべてF氏がチャンゴ教室の人々の生活からヒントを得て作成している。ヘイトス

ピーチのカウンターとして参加した様子や、チャンゴ教室に通うオモニが書いた作文などから一つ一つ作り上げている。このタルチュムの上演には、次世代に何を残し、伝えたいかというF氏の思いが込められている。それはチャンゴ教室として演奏を行う中で生まれてきたものであった。

技術面での向上に関しては、演目の中でもソロで行う部分が増えるなど、新たな試みが多数行われた。この演奏技術の上達は、その後の演奏活動にも大きくかかわっており、第27回三・一文化祭を境に演奏演目が多く追加されていった。また、助人で多くの演奏者が駆けつけ、演奏時間も一つ一つ長くなったこともゲスト演奏を少なくし、チャンゴ教室の演奏の時間が長くなった要因の一つであった。大阪在住の在日コリアンの若者たちや個人的に他県から演奏を盛り上げるために来た人、留学生の若者など、ゲストとして招待をしたのではない人々が多く集まった。そのため、一つ一つの演奏に加わってもらい、演目が長くなったのである。F氏も「過去最多の演者数であったのではないか」と述べていた。また、長年チャンゴ教室に通っている人は「三・一の広がりを感じることができた」と語っていた。チャンゴ教室のこれまでの他のコミュニティとの関係の維持、発展の成果が顕著に出た文化祭となった。

以上のように、チャンゴ教室の日常的実践が三・一文化祭の非日常的実践に大きな影響を与えていた。演奏スタイルの変化や演目の増加は、チャンゴ教室の実践の変化が関係しており、また他のマイノリティと関係を築く中で、よりメッセージ性の強い演目が作られた。チャンゴ教室の日頃の実践の積み重ねの中で形成された、他の演奏集団やマイノリティ集団とのネットワークが、三・一文化祭でも活用され、文化祭を盛り上げている。

4. コミュニティに支えられる三・一文化祭

以上、チャンゴ教室の日常的な実践を通して、三・一文化祭にどのような変化が起きているのか見ていった。その中で、積極的に他のコミュニティと関わりを作っていこうとする様子が観察された。それは文化祭の活動主旨の実現のために行っているともいえるが、そうせざるを得なかったという状況も存在している。

ここで、生野民族文化祭という実践を紹介する。生野民族文化祭は生野区という日本で一番在日コリアンが集住している地域で行われ、民族・民衆文化運動が起こるきっかけとなった祭りである。この祭りの影響で多くの祭りが誕生した。この生野民族文化祭は三・一文化祭とは異なり、他のコミュニティを自分たちの祭りに入れることには消極的であった。なぜなら、在日コリアンのみの祭りという点にこだわったからである。ではなぜそこにこだわったのか。それは在日コリアン以外を排除しなければ、在日コリアンである自分をポジティブに捉えることができなかったからである。しかし、このように在日コリアンのみの祭りを行ったのは、生野民族文化祭を入れて2つしかなかった。なぜなら、在日コリアンのマンパワーが生野以上にあるところはなかったのである。F氏は生野民族文化祭への参加経験がある。彼は、「生野の人は他のコミュニティの人を入れることを批判していたよ。在日だけでやりたいっていう思いはあったけど、在日だけの祭りを行えるのは生野だけだよ」と述べていた。そのことから、三・一文化祭は様々なコミュニティによって支えられ、様々な人やコミュニティに積極的に参加して

もらわなければ存続できないという現状が窺える。様々な要因が考えられるが、一つに集住形態の違いが挙げられる。福岡にも在日コリアンは多く居住しているが、生野ほど密集した地域ではない。このように地域の特徴等が祭りの形態にも影響を与えていると考えられる。

おわりに

本稿では日常的な実践の場であるチャンゴ教室の活動が、どのように非日常の実践である三・一文化祭に影響を与え、実践を維持、発展させていっているのか、また他のコミュニティとの関係や実践への影響を考察することが目的であった。チャンゴ教室は日常的な実践と非日常の実践を積み重ねる中で、積極的に複数のコミュニティと繋がっており、そこで演奏技術を習得することで、実践(演奏、スタイルなど)に変化をもたらしていた。そのようなチャンゴ教室の実践の変化や他のコミュニティとのネットワークは、三・一文化祭という非日常の実践を維持、発展させる原動力となっていることが考察できた。

このように、日常的な実践と非日常の実践の接続を見ていくことで、在日コリアンたちの文化的実践の様相の一端を垣間みることが出来た。しかし、この視点だけで三・一文化祭や彼らの文化的実践を理解したとは言えない。筆者は今後、在日コリアンの文化的実践の様相を探り、彼らのアイデンティティと言われるような、民族性の探求に関してより深い考察を行っていく予定である。そのため、より理解を深めるためには、まず民族学級などの教育システムとの関わりや繋がりの検討が挙げられる。なぜなら、民族講師をしている人の多くがこのような祭りに関与しているというケースが多く、三・一文化祭に関してもF氏が民族講師を現在勤めているからである。次に、地域差や地域の特徴を調査する必要性が挙げられる。先にも少し触れたが、在日コリアンは地域によって集住のあり方が異なり、それによって在日コリアンとしての生き方も異なってくる。密集地域なのか、分散型なのかという点で、実践を行う上での課題などが異なってくるのである。そして何より、身体という部分にフォーカスする必要が生が挙げられる。言語で表現するのではなく、身体で表現することの意味とは何かということが、文化的実践をみるうえで解決しなければならない課題である。これらの課題を念頭に置きつつ、在日コリアンの人々による文化的実践の研究を深化させていきたいと考えている。

主要参考文献

飯田剛史

2002 『在日コリアンの宗教と祭り 民族と宗教の社会学』世界思想社

2014 「民族まつりの展開と課題」『民族まつりの創造と展開 上 論考編』、飯田剛史(編)、pp. 3-40、JSPS 日学術振興会科学科研費・基盤研究(C)

稲津秀樹

2006 「在日韓国・朝鮮人運動のカルチュラル・ターン—生野民族文化祭における〈民族〉と〈楽しさ〉—」第7回(2006年度)J. C. C. Newton 賞受賞作品、関西学院大学図書館

<http://library.kwansei.ac.jp/profile/jc2006.html> (最終アクセス日 2015 年 10 月 26 日)

エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー

2002『コミュニティ・オブ・プラクティス』、野村恭彦(監)・櫻井祐子(訳)、翔泳社
金賛汀

2004『在日、激動の百年』朝日新聞社

金泰泳

1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社
ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー

1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』、佐伯胖(訳)、産業図書

田辺繁治

2003『生き方の人類学』講談社

田辺繁治、松田素二(編)

2002『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社
平井京之介(編)

2012『実践としてのコミュニティ—移動・国家・運動』、京都大学学術出版会

玄善允

2014「在日の精神史から見た生野民族文化祭の前史—在日の二世以降世代の諸運動と『民族まつり』」『民族まつりの創造と展開 上 論考編』、飯田剛史(編)、pp. 41-62、JSPS 日本学術振興会科学科研費・基盤研究(C)

1 「文化的実践」とは、直接的に国家などへ抗議するような政治運動や人権運動とは区別し、民族芸能などの民族文化も用いた活動のことをさす。

2 筆者は「在日コリアン」という表記を採用しているが、研究者によって「在日」や「在日韓国・朝鮮」など表記が異なっている。先行研究では著者の意図を尊重し、著者が使用している表記を採用している。

3 朝鮮半島に伝わる代表的な打楽器の一つ。両面を叩き、プンムル（農楽・風物）やサムルノリ（4つの伝統楽器を用いた演奏）の際には必ず使用される楽器である。

4 民団青年会小倉支部主催

5 1919年3月1日にソウルで起こった、日本の植民地支配時代に日本から独立を宣言した運動である。人類平等の大義を明らかにし、民族自存の正統な権利を享有しているのであるという精神のもと行われた。

6 F氏(50代・男性)は 在日コリアン2世である。80年代における関西・関東における民族・民衆文化運動に参加しており、在日コリアンに関する裁判などが身近で行われていた。また、韓国で数年間チャンゴなどの伝統芸能を学び、帰国後民族講師などを務めながら演奏活動を行っている。

7 東区の公立学校で週に2度、日本語の読み書きができない在日コリアンのオモニ(お母さん)たちに文字を教えている教室である。

8 日本人の参加者は教師やF氏の民族教育に触れた人、また、在日コリアンに関する問題に関心を持っている人などである。

9 福岡市内で毎年5月3,4日に開催される祭りである。昭和37年から市民総参加の『福岡市民の祭り「博多どんたく港まつり」』となった。「参加どんたく隊のべ約650団体、出場者約3万

3千人、見物客約200万人、春のゴールデンウィーク期間中、日本で一番の祭りといわれるようになる。」（「福岡市民のまつり 博多どんたく港まつり」より引用：

<http://www.dontaku.fukunet.or.jp/about/origin>)

¹⁰ 三・一文化祭では毎年2～3団体ゲスト演奏者を招いている。水原の人々は毎年招いており、年によって来日するメンバーは異なるが、交流関係は長年続いている。

Connect the Practice by playing Drums

– Focusing on the Janngu Class and 3.1 Cultural Festival –

Maki KANEKO

A purpose of this report is that the Janngu classroom that is daily practice considers what kind of influence there is in the 3.1 Cultural Festival that is non-daily practices. In addition, I consider the relationship with other community.

I show three activity examples and examine their practice. From three examples, the practice of the Janngu classroom let the practice change while they performed daily practice and non-daily practice. In addition, the exchange with other community becomes one of their important practices, too. They improve performance skills and reconfirm their activity by them.

Next, I examine the 27th 3.1 Cultural Festival. I observe a big change that is the programs of the Janngu classroom have increased in the Cultural Festival. Two factors are thought about in this. There are ①The performance skill of the member improved.②They question what they convey in the next generation while building the relations with other minority. Solo parts increased and they added programs that have strong message newly by them. It is thought that this change is influence of the practice of the Janngu classroom.

From the above, the Janngu classroom was connected to other community positively while they repeated daily practice, non-daily practice and brought a change for practice (including a performance and a style) by learning performance skills there. It was a power that a change of the practice and the network of such Janngu classroom maintained a 3.1 school festival and developed it.